

## 第7章 旅の終焉とその謎

京に滞在していた彦九郎は、光格天皇の実父典仁親王への尊号宣下が松平定信の反対にあい、保留されていることを知るようになります。

寛政3年（1791）3月28日に文治の兆しとされる「神亀」を先帝の叡覧に入れるとあります。

彦九郎は、緑毛亀の摺物500枚と白木屋より金10両を借用して、寛政3年7月19日、あわただしく九州、四国への旅に出ようとします。九州では、翌年正月元旦、熊本城下の藪孤山宅で正月を迎えているところから「筑紫日記」は記されています。

その後、薩摩国へ入国するため、熊本を出発しています。途中、米良街道を通り九州を横断しています。再び戻って薩摩街道に出て、赤崎禎幹（海門）の手引きにより野間ノ関より薩摩に入り、薩摩藩で接待を受け滞在しています。

薩摩では、開聞岳や坊ノ津を訪れています。この後薩摩を出発し、日向街道を北上し、延岡・竹田を経て、熊本に戻ります。しばらく滞在した後、熊本から日田・竹田・佐伯・日出・中津・日田・久留米へ到着し4日間滞在后、筑前太宰府や博多を旅し、再び久留米を訪れ、森嘉膳（嘉善）宅で自刃します。

九州での彦九郎の旅は謎に満ちています。